

情報科学芸術大学院大学開学前後の経緯とその未来を考察する

History of IAMAS and its Future

坂根 巖夫*

SAKANE Itsuo

Abstract From April 1st, 2014, IAMAS school will move from its place at Ryokecho to the Softopia Japan Center in the same city. As I had worked as a first president at IAMAS from 1996 till 2003, I would tell about the background of IAMAS and its future. The original idea of IAMAS itself was proposed by the Governor Taku Kajiwara of Gifu Prefecture, after he became the Governor in 1990 through the election. It was one of his important proposals to make his Prefecture as an information-oriented prefecture. And IAMAS was one of his major ideas to make his dream realize while he works as a Governor. After several meetings for setting its major context and contents of IAMAS by the planning staffs' committee members, I was asked to be the president at IAMAS in 1995 from the Governor and the committee members. It was my great honor, so I accepted such an important position and had worked to settle the necessary contexts and contents of IAMAS before its opening.

Keyword Media Art, Information technology, Art and Science

1. はじめに

来春の平成 26 年 4 月、岐阜県大垣市加賀野のソフトピア・ジャパンに情報科学芸術大学院大学(IAMAS: Institute of Advanced Media Arts and Sciences)が移転するという。その経緯を振り返るとき、じつはその前身に、いまから 17 年前の 1996 年 4 月、大垣市領家町の旧女子高校跡に開校した国際情報科学芸術アカデミー (IAMAS: International Academy of Media Arts and Sciences) があったことを無視して語ることはできないだろう。同じ IAMAS という略称を使いながらも、この最初の IAMAS が、開校以来何度かの組織の変革を経た末に、アカデミーの部分が 2012 年 3 月に閉鎖されて大学院大学だけが存続し、今度の IAMAS 移転に至ったもので、この 17 年間の変遷の歴史についても触れなくてはならないだろう。

しかも私自身、その最初の IAMAS 発足の際に、当時の岐阜県知事梶原拓氏から要請されて、その設置構想の段階から関わり、最初到大垣市領家町に発足した IAMAS の学長として 7 年間を勤めただけに、いま改めてその変遷の歴史を振り返るとき、感慨無量のものがある。

* 情報科学芸術大学院大学名誉学長 President emeritus of Institute of Advanced Media Arts and Sciences

2. 情報化時代の人材育成をめざして発足した最初の IAMAS

1990年に岐阜県知事として当選した梶原拓氏が、新しい岐阜県の未来のために掲げた目標の一つが、来るべき情報化時代に備えて、情報化産業を誘致し、情報立県にするということであった。これは当時、アメリカのゴア副大統領がとなえていた情報スーパー・ハイウェイ構想に触発されたともいわれているが、梶原知事が掲げた情報化構想は、具体的には三つのテーマにしばられていた。一つは新しい情報化産業を誘致するセンター的な役割をもつソフトピア・ジャパン・センターの設立、二つ目が、新しい情報化技術の研究開発を行う研究センターVRテクノジャパン(現在のテクノプラザ)の設立、そうしてその三つ目が、これからの情報化産業の担い手やソフトウェアの制作を担う人材育成の場としての学校の設立で、IAMASはその三つ目の大きな使命を期待された情報化時代の学校であった。

この情報化時代の人材育成の学校の構想は、当時、知事の相談役であった岐阜県企画部参与の安藤隆年氏や、名古屋大学の月尾嘉男教授らの意見をもとに、1991年11月、慶応大学教授の石井威望氏や建築家黒川紀章ら数人のメンバーによるソフトピアジャパンの顧問懇談会が作られて、そのなかで審議が始まった。さらにその結果に基づき、1992年10月には石井威望氏を委員長とする「先端情報技術アカデミーGIFU(仮称)」をテーマとする設置事業検討調査及び同設置推進計画策定委員会が発足、以後、数回にわたって同校の検討会議が開かれた。

私自身はこの段階ではまだこの計画に参加していなかったが、1994年2月頃、月尾嘉男教授の訪問を受け、梶原知事から私にこの学校の開設に加わって欲しいという要請を告げられた。当時、私は慶応大学教授でもあり、たまたま病気で入院中だったこともあって、いったんは断ったものの、5月にアカデミーの開設準備委員会が正式に発足した際には参加することになり、その最初の会合で委員長に互選され、結果的に同アカデミーの学長となることになった。ちょうど私の慶応大学の定年直後に始まる学校でもあり、それまでの期間は慶応で教えながら、この新しい学校の構想を練ることに費やすことにした。

ただ、その過程では、“先端情報技術アカデミー”という仮称が、メディア技術者の養成だけをめざしているような印象を与えることや、これからの新しいメディア・コンテンツの制作には国際的なセンスや芸術的感性の持ち主も必要だと考えて、校名を国際情報科学芸術アカデミーという名称に変えることを知事に訴え、その結果この名称に決まったという経緯もある。情報化時代の新しいソフトウェアの制作には、情報化技術だけでなく、幅広い視野をもちながら、新しいメディア技術の美学や芸術的感性の育成が欠かせないと思ったからである。

3. 海外の動向の調査から

以上の理由から、従来のコンピュータ・ソフトの専門学校の例でなく、ヨーロッパで始まっていたメディア・アートの学校のカリキュラムの方が参考になると思い、フランクフルト・アム・マインの県立ニューメディア研究所(Institute for New Media)や、カールスルーエの県立造形大学(Hochschule für Gestaltung)、アメリカの例ではニューヨークの School of Visual Arts in New York のカリキュラムなどを取り寄せて、参考にした。

これらの学校では、いずれもアーティスト養成と産業用ソフト製作者養成の目的を一体にしている、すでに国際的なメディア・アートのコンテストやイベントへの作品出品によって、すぐれた成果を挙げつつあった。例えば、ケルン・メディア・アート・アカデミーの卒業生

は、オーストリア・リンツのアルス・エレクトロニカの 93 年度インタラクティブ・アート部門でグランプリを得ていたし、それ以外にも何人かの学生が出品して高い評価を得ていた。

4. 領家町で始まった初期の IAMAS の構成

アカデミーの構想は以上のような人材の養成を目標に、大学院レベルのプロジェクト型創造教育を行う「メディア・アート・アンド・ラボ」コースと、新しい映像情報などメディア・アートの作り手としてのスペシャリストを養成する 2 年制の専修コース「マルチメディア・スタジオ」コースの二つを設けることになった。前者は大学卒業かそれと同等の学力をもち、メディアを使って新しい社会人として働こうとする人を対象にしたものであり、後者は高校卒業の学生か、すでに高校卒業後社会人として働いている人を対象にしたコースであり、前者の定員は一学年 20 人、スタジオ・コースの定員は一学年 30 人と、極めて少人数の学生を選抜方式で採用する少数精鋭の教育環境であった。

一方、教師陣は、マルチメディア、CG、映像、音響、造形など各分野の教師を、それぞれ教授、助教授、講師、助手とそろえながら、単に専門分野だけの教育に専従させるのではなく、総合的なマルチメディア・ソフトの高度な作り手をめざして、教師同士の自由な発想による実験的な指導教育システムを取り入れることをめざしていた。

また、旧女子高校の 4 階建ての校舎は、カリキュラムの編成に基づいて対応する機材を設置し、コンピュータ室、講義室、CG、映像、インタラクティブ・メディア、音響、総合造形の各ゼミ室、DTV ルーム（映像編集室）、写真室などを設けて、これらの機材を学生が自主的に使って研究できるよう、また授業時間外にも使えるような体制をとり、24 時間制作ができるように、校舎内に仮眠室も設けた。

同時に、インターネット利用による国際的な視野をもつ創造者の育成を考えて、すべての学生にインターネットアカウント（電子メールのアドレスやウェブサイトの ID）を持たせた。世界の大学、教育機関、企業などと結んで情報交換のできる環境を構成し、国際的な視野をもつ新時代の表現者の育成を図ったのである。

5. 大学院大学コースの認可

IAMAS 開学の際に開講した Media Art & Lab コースは、大学を卒業した学生が受験するもので、大学院コースにも匹敵するものであったが、当時、すぐに大学院として認可をうるには十分な実績を伴っていなかったため、開学時には上記のかたちで発足したが、せっかく大学卒業後に IAMAS をめざして受験する以上、このコースを大学院大学の修士課程として認可させたいという声が高まり、開学後、申請に必要な準備を進めて、2001 年には文科省から正式に認可され、それに伴って 2001 年 4 月から IAMAS のアート・アンド・メディア・ラボ科が無くなり、修士課程のメディア表現研究科だけのコースからなる情報科学大学院大学となった。明春、ソフトピア・ジャパン・センターで開学する IAMAS は、従ってこの IAMAS の大学院コースが移転するものである。

6. アーティスト・イン・レジデンス制の採用

メディア・アートは、当時欧米ではすでに SIGGRAPH やアルス・エレクトロニカなど、国際的な発表の場を通じて、多くのパイオニア的な作家が現れ始めていたが、日本ではまだ作品発表の場も少なく、大学などで学生が触発される機会も少なかった。まして岐阜県の大垣

は、東京や大阪からも遠く、学生がそんな作品と触れる機会も非常に少なかった。

そこで、新しい IAMAS のなかにアーティスト・イン・レジデンス制を設け、国際的にもユニークな作品を発表している作家を招いて、学生たちと一緒に作品制作を行える場を設けてはと考え、日本ではまだ珍しいアーティスト・イン・レジデンス制の導入を始めることにした。そこでまず、当時、世界でも注目されていたメディア・アートの研究センターであるカールスルーエの ZKM に客員芸術家として一年間滞在後、帰国したばかりの岩井俊雄氏を、IAMAS の最初の客員芸術家として委嘱することにした。

またそれと並行して、そんな客員芸術家が制作に専念し、学生の制作活動までできる工房の必要性も考えて県に提案し、1997 年には建築家瀬島和世の設計で、校庭の一角にマルチメディア工房が完成した。(この建築デザインは 1998 年度の建築学会賞を得ている)。

IAMAS の客員芸術家として、最初に招いた岩井俊雄は、IAMAS 滞在中に制作した作品「MPI × IPM (Music Plays Images x Image Plays Music)」が、その後 1997 年に、音楽家坂本龍一と組んでアルス・エレクトロニカのインタラクティブ・アート部門に応募して、グランプリを受賞したが、その設営の際には、この作品制作に協力した IAMAS の学生たち十数人も現地に参加した。また岩井俊雄に続いて、翌年には、すでに来日して関西のけいはんな学研都市の研究機関 ATR で働いていた Christa Sommerer と Laurent Mignonneau を客員芸術家として招聘した。彼らも同様に、IAMAS 滞在中にユニークな作品「Haze Express」を制作し、アルス・エレクトロニカの公募展に選ばれて展示した。その後 IAMAS では彼ら二人を助教授として採用し、二人が 2005 年にリンツの University of Art and Industrial Design, Institute for Media の教員となって異動するまで IAMAS で教えていた。IAMAS ではその後も世界各国から毎年一人か二人の作家を客員芸術家として招き、学生との指導を兼ねた共同作品の制作を続けてもらうことになった。私の退官後の 2007 年には、この制度の発足以来招聘した作家の数が 20 組にも達したため、それを記念する記念誌「IAMAS Artists in Residence (アーティスト・イン・レジデンス 1996-2007)」が刊行されたほどであった。招聘した作家たちはすでに述べたように、国際的なメディア・アート展に応募して受賞したケースも多く、IAMAS の客員芸術家制度は国際的にも評価されるほどになっていった。

7. 開学前のイベントの計画

とはいうものの、開学の 1996 年当時には、まだメディア・アートそのものが世間に知れ渡っていたわけではなく、東京・西新宿にメディア・アートのセンターとして NTT インターコミュニケーション・センターができたのも、1997 年のことで、一般にはあまり知れ渡っていなかった。そこで、IAMAS の開学前に、広く国内外から優秀な学生を募るために、最新のメディア・アートを広く知ってもらう必要があると考えて、開学の前年に、当時世界的にも知られていたインタラクティブ・アートの作家たちを招き、最新の作品を公開する展覧会「インターラクション展」を開くことを計画。開学半年前の 1995 年 7 月に、大垣市のサイトピアセンターで、一週間の「インターラクション'95-インタラクティブ・アートへの招待展」を行った。情報化技術によるアート作品のなかでも、観客がインターフェースを介して、直接作品に触れ合うと、作品が反応してさまざまな表現を展開するという最新作品を選んで公開することで、この世界の魅力を訴えると同時に、新しく発足する学校 IAMAS への優秀な希望者を募ろうという意図からでもあった。

幸いに、この展覧会の予想外の成功によって、今後とも同様な展覧会やシンポジウムの会を続けて行くことを考え、このインターラクション展は、その後も 2 年に一回開くビエンナー

レ方式で続けることに決まった。こうして、このインタラクティブ展は、私が学長を続けている間には、95年、97年、99年、2001年と、合計4回も開くことができ、それぞれに毎回、世界各地で活躍しているメディア・アーティストを選んで招待し、展覧会と同時に、シンポジウムも行っており、成功裏に進んできた。ただ、2003年に私が退官後は、県の予算的な制約もあって規模を縮小したが、その意図を生かしてその後も大垣ビエンナーレとして継続されている。

8. メディア文化を育てる理工系と文科系の協力体制をめざして……

IAMAS 発足当初、従来の理工系の出身者と文化系、芸術系出身者が混在するコースでは、学生たち自身にかなり戸惑いもあったようだった。二つの異なる世界をどうつなげるかに教員達も苦勞した。両者を組み合わせたワークショップで、新しい作品の提案をさせる試みも行ったが、最初のうちは理工系出身者から、芸術系出身者のアシスタント役になっているようだという不満がもち上がり、両方が互いに理解し合い協力しあえるためのワークショップを設けるなど、さまざまな試みも行った。

授業のなかに、わざと両方の分野の出身者を交える形でワークショップを行うという試みもその一つで、1997年11月10日から14日まで、パリ第八大学の教授でインタラクティブ・アーティストとして世界的に注目されていたジャン＝ルイ・ボアシェ教授を招き、18名の学生たちに“The Canteen”というテーマで、学校の食堂周りだけから拾って作品を制作するという協同制作のワークショップを実施した。学生たちを新しいメディア・アートへの可能性に目覚めしてほしいと思ったからであった。

9. メディア文化に関する国際会議に IAMAS も参加して

メディア・アートが従来の伝統的な既成学問のジャンルと違って、情報化時代という国際的な問題意識を触発するものだけに、その人材育成にも幅広い視野からのアプローチが要請されてくる。梶原知事もそんな問題意識からの思いが強く、その後幾つかの国際会議が IAMAS を中心に開かれることも多かった。

例えば、1998年にはその前年に完成していたソフトピアジャパンセンターで、VSMM(Virtual Systems and Multimedia)と称する国際会議が開かれ、私も「科学と芸術の融合の未来について」というテーマで発表し、学生たちも協力した。

ロンドン大学の数学者だったジェームズ・ヘムズレー (James Hemsley) 氏は、1990年以来、ヨーロッパ各地で電子メディア文化をテーマにした国際会議 EVA (Electronica Imaging & the Visual Arts)を始めていたが、知事もその動向を知って、1998年以降、三回もの EVA 会議を岐阜県で開催することになり、98年4月には EVA-GIFU98 の国際会議を長良川のほとりの未来会館で開催。海外からドイツの ZKM をはじめ、何人ものスピーカーを招いてシンポジウムを開き、学生たちも傍聴し、私も IAMAS 学長として参加した。

99年5月にはヘムズレーとフローレンス大学のビート・カップペリーニ(Vito Cappellini)教授が協力して、フローレンスでトスカナ州主催の MediARTec 会議と同時に EVA-Florence 会議を併設して開いたが、この会議にも岐阜県から梶原知事の情報化政策の一環として私が派遣され、県の情報化政策や IAMAS について発表した。また同年6月には、フランス・ラバル市で Laval Virtual というメディア技術の応用分野を展開する会議が開かれ、ここにも私が同様に派遣されて、岐阜県の情報政策と IAMAS の活動について報告した。

さらに翌2000年10月4-6日には、大垣市のソフトピアジャパンで二度目の EVA-GIFU2000

を開き、私がコーディネーター役を務めて、北京の清華大学卒業後、筑波大学を經由して東京大学人工物研究センターの研究員をしていた陳玲女史やヘルシンキ芸術大学メディア・ラボ研究院のリリー・ディアス、シドニーのパワーハウス・ミュージアムのプロデューサー、サラ・ケンダーダインら数十人を招いてシンポジウムを行った。

さらに 2002 年 4 月には、この陳玲女史がヘムズレーの指導のもとに、北京の清華大学で EVA2002 北京を開催し、海外からのメディア文化の関係者の他、日本からは私を含め数人が招かれて発表した。しかも、同じ 2002 年 11 月には、ヘムズレー自身も参加し、私が実行委員長となって、大垣市情報工房で国内三度目となる EVA-GIFU2002 を開いた。この時には、エジプト学研究所長の吉村作治教授に基調講演を依頼。パネルディスカッションは「メディア文化は世界の相互理解にどう貢献できるか」をテーマに、IAMAS の吉岡洋教授がコーディネーターとなり、パネリストに香港在住のエッセイスト羽仁未央、米バーモント大学名誉教授で当時、東京芸術大学客員教授だった歴史遺産の専門家チェスター・リーブズ、マルセイユ美術大学教授のエリック・マイエ氏らを招いて行った。

ここではさらに、「アーカイブに何が可能か」、「デジタル化は地域活性化にどう役立てられるか」、「創造的なコンテンツをめざして」、「ネットワークの未来像」をテーマに四つの分科会も開かれ、多くの発表者を招いて語り合った。分科会 I は、シエナ大学情報工学部のアレサンドロ・メコッチ教授がチェアマン、発表者には海外からの 4 人の他、国内では東京大学の青柳正規教授（当時は国立西洋美術館長で、現在は文化庁長官）らも参加した。分科会 II では、フローレンス大学のビート・カップペリーニ教授がチェアマンとなり、発表者には東京芸術大学の桂英史教授（当時助教授）らが参加。分科会 III は私自身がチェアマン、発表者には IAMAS の入江経一教授やミラノのスタジオ・アッズーロの代表者パオロ・ローザ、分科会 IV は、日本電気（株）政策調査部の小野田勝洋氏がチェアマン、発表者には韓国科学技術研究院のヨン・ムー・クワン、さらにフローレンス大学のビート・カップペリーニ教授も参加するなど、きわめて国際色の濃い会議で盛り上がった。

また、2002 年 8 月にはブラジル・サンパオロのイタウ・カルチュラルが主催した「Artificial Emotion」の会議にも招待され、私は「芸術と科学の革新的な協調に向けて (Toward the innovative Collaboration between Arts and Sciences)」と題して講演を行ったが、この時には、後述するように、IAMAS の学生、教員たちによる作品も展示され、何人もの学生たちも参加した。

オーストリア・リンツのアルス・エレクトロニカは、1979 年開始以来、毎年メディア・アートの国際的な祭典として続いていて、私自身、ジャーナリスト時代の 1982 年から毎年のように参加してきたが、2003 年にはそこでまったく予告していなかった Golden Nica for Life Achievement 賞(永年功績賞)というのを授与された。しかもその翌年 2004 年には、アルスがその数年前から始めていた世界各地の優れた大学を招いて開く展覧会に、IAMAS も選ばれ、全学を挙げてその展覧会に参加した。私自身はその前年にすでに退官していたが、この展覧会の視察とブルックナー・ハウスでの講演会を頼まれたこともあって出席し、2 時間半もの講演[アートとテクノロジーの相関史-人類の文化革命をめざして]を行った。IAMAS からは数十人もの学生、教員が参加して盛り上がった。

10. 海外の展覧会に IAMAS が参加してデジタル化した国宝までを出品

梶原知事の文化史的な関心からの成果はそれに留まらず、2000 年 7 月から 9 月までアメリカのフィラデルフィア美術館で開かれた「本阿弥光悦展」には、県として協賛事業を行うこ

とになった。このときには、IAMAS も参加することになり、永原康史教授がディレクターとなって、教員、学生ら 10 人が参加し、国宝である本阿弥光悦の作品 2 点を、同展を訪れた人が触って鑑賞できるという作品に仕立てたものを出品した。

その一つは、京都国立美術館に所蔵されている光悦の絵巻物「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」という絵巻物を、そっくりそのままのバーチャルな作品に仕立てて、観客が手に触れてこの絵巻物をたぐることのできる展示物であった。

描かれている和歌に触れると、京都の冷泉家の歌詠み人に詠ってもらい録音した和歌の声が聞こえてきたり、その意味を英文でも読むこともでき、さらにその絵巻物の下絵として描かれている俵屋宗達の絵を、巻物の最初からスクロールして、アニメーションのように眺めることまでできる展示物として完成した。

もう一つは、やはり光悦の作と伝えられる国宝で、東京・五島美術館に所蔵されている黒楽茶碗「七里」を、特別の許可を得てCTスキャンして、本物とそっくりのプラスチック製茶器をつくり、これにセンサーをつけて、観客が手にとって傾けると、目の前のスクリーンに本物の「七里」の映像も傾いて、高台から茶溜まりまで手に取るようにみることができるというインタラクティブな作品であった。

さらに、すでに触れたように、2002 年には、ブラジル、サンパオロのイタウ・カルチュラル (Itau Cutural) が主催する国際会議に、やはり IAMAS も招待され、教員、学生が制作した展示物の幾つかも出品し、私もスピーチを行った。このときに出品した作品の一つは、北斎の浮世絵「富嶽三十六景」をテーマにしたもので、関東周辺の地図上に観客が置く人型の位置によって、その付近から描いた北斎の別の作品や、現代の状況の写真までが現れるという参加型の作品であった。

また学生が制作した情報展示盤「インフォテーブル」には、現地の身体障害児たちを招いて参加してもらったが、手の使えないこどもたちが頭につけた棒でテーブル上の駒を動かすと、そこに現れるイメージが変化するダイナミックな作品で、こどもたちが歓声を上げて楽しむ姿を見守ることができた。

このように、IAMAS 勤務中の 7 年間は、毎日が未知の世界を切り開くための挑戦に明け暮れた。しかし、その成果は徐々に現れ始めて、IAMAS は次第に国内外でも認められる学校になってきた。そして、その最初の大学院大学の卒業生がでる 2003 年 3 月末には、私自身大垣での単身赴任生活にいささか体力の限界を感じて、思い切って退官することにした。

残念なことに、IAMAS 自体は県の財政難のせいで、県費による客員芸術家制度が 2009 年にストップした。さらに専門学校生が卒業する 2012 年 3 月には、専門学校自体が閉鎖され、大学院大学だけが存続することになった。

ただ、県費による IAMAS の客員芸術家制度は打ち切られたものの、外部の協力団体からの援助が得られればその範囲で継続するという方針も決まり、とりあえず平成 22 年度 (2010 年度) は、文化庁海外メディア芸術クリエイター招へい委託事業の協力を受けて、三組程度の客員芸術家を受け入れることができた。将来のことはまだ分からないが、この客員芸術家たちが制作した作品は、従来通り「おおがきビエンナーレ」で発表される予定で、2010 年度はテーマ「温故地新(Product as New Art)」のもとに、同年 9 月 22 日から 26 日まで、大垣市内で展示された。テーマを「温故知新」でなく「温故地新」としたのは、地場産業や、地域への貢献への期待を秘めたからだという。

地方自治体の財政難のなかでも、開学以来 IAMAS が果たしてきた役割は国内外で高く評価されてきただけに、今後も優秀な卒業生が次々に世界に羽ばたいていくことを期待したい。

また同時に、IAMAS の客員芸術家制度も、幅広い分野からの支援を待つてぜひ今後も続けられるようにお願いしたい。すぐれたメディア・アート作品を世界に発信し続けていく学園として、IAMAS の未来に私は賭けたい。(了)